

かゝるを世人、大己貴命・少彥名命をのみ祖神と思奉は、書紀に神代に、夫大己貴命與少彥名命戮力一心經營天下、復爲顯見蒼生及畜產、則定其療病之方、又爲攘鳥獸昆虫之災異、則定其禁厭之法、是以百姓至今咸蒙恩賴賴字古語拾遺に續て、皆有効驗と有をみてのわざなれど、然二處ながら定と書たるにても、前より有來たる方法を、後に二神等撰論定たまひし故なるを悟るべし。かく國をさへ生ますばかり、いと畏き皇神等の、造まし、方法等の靈異なるに、今又二神の殊更に定ましたれば、飽ぬことなく備て、いかなる病も愈ざるはなく、いはんすべせんすべえらに、極ていともく靈妙なる方法なめれば、世人等閑にな思過しそ。

〔黃帝鍼灸甲乙經〕黃帝三部鍼灸甲乙經序

晉玄晏先生皇甫謐

夫醫道所興其來久矣、上古神農始嘗草木而知百藥、黃帝咨訪岐伯、伯高、少愈之徒、內考五藏六府、外綜經絡血氣色候、參之天地、驗之人物、本性命窮神極變、而鍼道生焉、其論至妙、雷公受業、傳之於後、伊尹以亞聖之才、撰用神農本草、以爲湯液、中古名醫、有愈跗、醫緩、扁鵲、秦有醫和、漢有倉公、其論皆經理識本、非徒胗病而已、漢有華佗、張仲景、其他奇方異治施世者多、亦不能盡記其本末略下

〔枕苑日涉〕五民

沿革傳來

醫方之設、蓋起于地神氏之前、日本紀曰、大己貴命與少彥名命戮力一心經營天下、又爲蒼生定療病之方、此本邦醫方之始也、然載籍失傳、其詳不可得而稽焉、欽明天皇十五年春正月、百濟國王奉勅、貢醫博士奈卒王有稜陀、採藥師施德潘量豐、固德丁有陀、三韓紀略曰、魏景元元年、百濟設官十六品、第六品曰奈卒、第八品曰施德、第九品曰固德推古天皇十年冬十月、百濟僧觀勒來獻曆書及天文地理遁甲方術之書、時山背臣日並立學方術、並日本紀略曰、後漢土之醫籍、傳播日廣、良工輩出、撰述亦不乏略、○註桓武天皇時、有蘇氣廣世、本朝醫考曰、蘇長子延曆中撰藥經太素等、曾孫時雨、承平中、叙醫博士、天曆十一年任典藥頭、承波宿禰、叙從五位上、任鍼博士、永觀二年十一月獻心方三十卷、蘇氣丹波兩氏、古今稱爲扁倉、○註子孫傳其業、以至于今矣、其他記